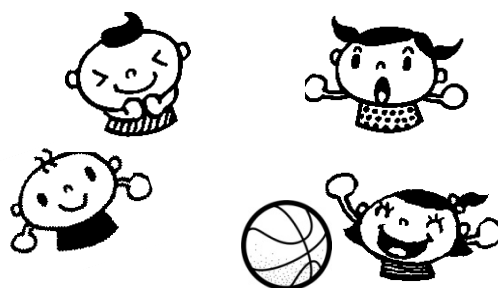


規範意識の芽生えを培うための教師の援助の工夫

～友達とのかかわりを通して～



那覇市立大道幼稚園教諭

下地 恵美理

目次

I	テーマ設定の理由	43
II	研究目標	43
III	研究仮説	44
	1 基本仮説	
	2 作業仮説	
IV	研究構想図	44
V	研究内容	44
	1 人とのかかわりについて	
	(1) 人とのかかわりの育ちを見る視点	
	(2) 乳幼児期における人とのかかわりの発達	
	2 幼児期において規範意識の芽生え培うための基本的な考え方	
	(1) 幼児の規範意識の芽生えとは	
	(2) 規範意識の芽生えを培うための様々な体験	
	3 教師の援助について	
	(1) 様々な援助の方法	
	(2) 規範意識の芽生えを培う教師の役割	
VI	保育実践	50
	検証保育までの実践と本時の取り組み	
VII	結果と考察	52
	作業仮説の検証	
VIII	研究の成果と課題	56
	1 成果	
	2 課題	

《主な参考文献》

規範意識の芽生えを培うための教師の援助の工夫

～友達とのかかわりを通して～

那覇市立大道幼稚園教諭 下地 恵美理

I テーマ設定の理由

幼児期の教育は、子どもの基本的な生活習慣や態度を育て、道徳性の芽生えを培い、学習意欲や態度の基礎となる好奇心や探求心を養い、創造性を豊かにするなど、小学校以降における生きる力の基礎や生涯にわたる人間形成の基礎を培う上で重要な役割を担っている。しかし、全国的に子どもを取り巻く社会的環境の著しい変化の中「幼児の育ち」について、基本的な生活習慣の欠如、運動能力の低下、小学校生活にうまく適応できないなど多くの問題が指摘されている。このような中、平成21年度から新幼稚園教育要領が施行され、領域「人間関係」では「規範意識の芽生えを培うこと」が追加された。また、内容の取り扱いにおいて「集団の生活を通して、幼児が人とのかかわりを深め、規範意識の芽生えが培われることを考慮し、幼児が教師との信頼関係に支えられて自己を発揮する中で、互いに思いを主張し、折り合いを付ける体験をし、きまりの必要性などに気づき、自分の気持ちを調整する力が育つようにすること。」と新たに加えられた。幼児期における規範意識の芽生えについては、幼児期の段階で完璧にきまりを守れるように育てることがねらいではなく、遊びや生活の中でさまざまな体験を通してきまりの必要性に気づいたり、自ら守ろうと感じたりしていきながら規範意識の芽生えを培っていくのではないかと捉える。

本園の幼児の実態は、明るくて人なつっこく、伸び伸びと行動し、体を動かすことが大好きな子が多い。しかしその反面、友だちと過ごす中で、自分の思いを通そうとし遊びが中断したり、遊ぶ順番や遊具の使い方においてトラブルが生じたり等、教師の援助が必要な場面が多い。また集まりの場面で話が最後まで聞けない等、日々の生活上のきまりを幼児なりに理解し、守ろうとする気持ちが低いように思える。これまでの私の保育を振り返ってみると、幼児一人ひとりが自己発揮できるように信頼関係を築き、園生活の中で起こる様々な出来事に丁寧にかかわることを意識してきた。しかし、友だちとの遊びの中でのトラブルの際、子ども同士でのかかわり合いにおける声かけや、葛藤体験、折り合いをつける場面での援助において迷いを感じることもあった。また教師による援助から善悪の判断を作り、自分なりに考えたり気づいたりする場を安易に進めていたのではないかと反省する。幼児の言動の奥にある心の動きの捉えや、日々の保育から幼児の内面の読み取りの浅さを感じている。

そこで、幼児期における人とのかかわる力について発達段階を踏まえながら理解を深め、園生活において、幼児が多様な体験を通して、きまりの大切さに気づき、守ろうとする姿を捉え規範意識の芽生えを培うための教師の援助の工夫について研究したいと考え本テーマを設定した。

II 研究目標

友だちとのかかわりの中で、規範意識の芽生えを培うための教師の援助について研究する。

Ⅲ 研究仮説

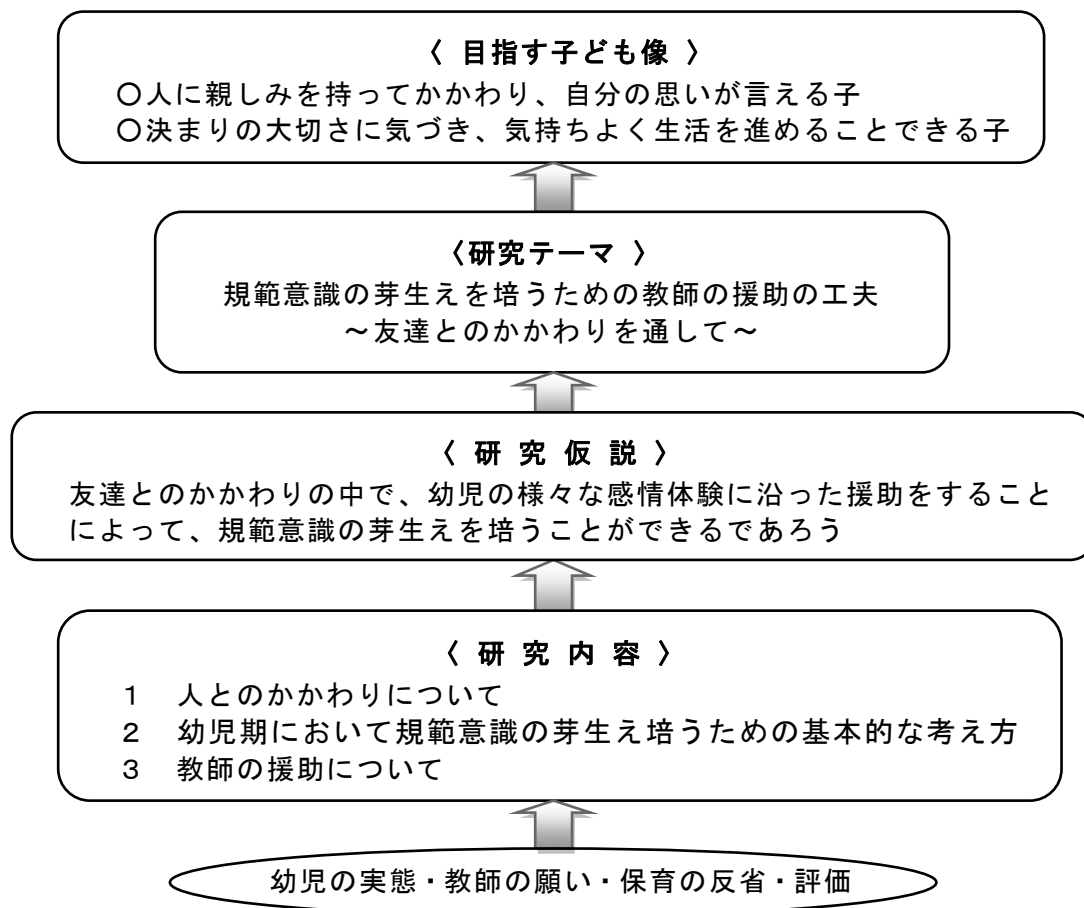
1 基本仮説

友達とのかかわりの中で、幼児の様々な感情体験に沿った援助をすることによって、規範意識の芽生えを培うことができるであろう。

2 作業仮説

- (1) 園生活の中で、相手や周りの気持ちに気づけるような援助をすることで、気持ちよく生活していくために必要な決まりに気づくであろう。
- (2) 遊びの中で、葛藤体験や折り合いをつける体験などをし、ルールを守りながら遊ぶ楽しさが味わえるような援助をすることで、自分の気持ちを調整する力をはぐくむことができるであろう。

Ⅳ 研究構想図



Ⅴ 研究内容

1 人とのかかわりについて

- (1) 人とのかかわりの育ちを見る視点

幼児は人とのかかわりの中で、様々な出来事を通して、嬉しい、悔しい、悲しい、楽しいなどの多様な感情体験を味わう。そのような感情体験の中で、行動になってあらわれるものは目にみえるが、信頼感や安定感、存在感などは直接目に見えるものではない。しかし、保

育者として直接目に見えない子どもの内面を「見る」という姿勢が大切であるとする。子ども一人一人との直接的なかかわり、そして一人一人を丁寧に見ていく視点を以下にまとめる。

信頼関係

信頼関係は、子どもの大人への信頼感とその大人の子どもの信頼感とが対になって成り立つものである。大人が子どもに向ける信頼感は子どもを肯定的にみることにつながり、子どもの自信となる。信頼関係が子どもの人とのかかわりの基盤となる。

依存と自立

幼児は、保育者に依存している状態から徐々に自立へ向かうのだが、それは一方的ではない。園生活にも慣れ、当番活動もしっかりこなす5歳児でも、生活のなかでうまくいかないことに直面したときや、自分では処理できない感情を経験した時には、保育者の援助を求めたり、そっと保育者の傍らに寄り添って乱れた気持ちを落ち着かせようとすることがある。また、何かに挑戦するときも保育者の温かいまなざしや励ましが子どもの支えになり「依存しつつ自立へ」向かっていると考える。

自己発揮と 自己抑制

幼児が何かに取り組むときに、「自分が」「自分で」「自分から」という気持ちで取り組むことが自我の育ちである。自我の発達により自己主張や自己発揮がさかんになる。しかし、それぞれの子どもが自己主張や自己発揮が見られると衝突やいざこざが生じる。そのことにより自分とは違う他者がいること、他者は自分とは違った意図やイメージを持っていることに気づき、他者と一緒に遊びたいという思いから、自分のやりたいことを抑えて折り合いをつけること、自己抑制を学んでいく。

思いやり

友達とかかわる中で、互いに動きや考えを取り入れたり、一緒に遊びをつくり上げる経験だけでなく、友達に自分の思いや考えが聞き入れられずに拒否されたり、自分の思いとは異なる方向に進むことでいざこざが生じる。しかし、その葛藤体験の中で、相手の気持ちを考えたり、自分の思いを相手にわかってもらえるよう言葉で伝えることの大切さ、幼児なりに伝えたり交渉したり、譲ったり謝ったり、許したりすることの必要性を感じ、他者のことを思いやる体験を積んでいく。

自励心、 自制心

生活や遊びを通して、自分自身を鼓舞して粘り強く頑張ることを自励心が育つという。また自分の欲求を自制し、我慢すること、失敗や間違いをしても次に生かしていこうと努力する姿を自制心といい、積極的な自制心は、本当にやりたいことを自分でやってみようという挑戦する姿にも見られるようになる。

自己信頼性

生活や遊びを通して何かできないことがあって困った時に、力になれる友達の存在を知らせ「〇〇さんに教えてってきいてみたら？」と投げかける。できる力を持った子、教える力がついた子は「相手にわかるように教えてあげる」（教えることに苦勞する経験や工夫して繰り返し教えることが力になる）ことを通して、「ありがとう」と相手に喜んでもらったりする経験を積み重ねることによって自分に自信を持つことができる。「できた」という体験を出発点としてそれを確かな「できる力」に高め、自己信頼性を培っていく。仲間の中で教え合いを通して「自己信頼性＝自信＝自立性」が形成されていく。

自己有用感

自分がしたことを感謝されて嬉しかった、自分は頼りにされている、自分も誰かの役に立っている、みんなから認められている等、他者と交流することで得られる感情を自己有用感という。似た言葉に、自己肯定感、自己存在感、自尊感情などがあるが、自己有用感は自分本位ではなく、他者が存在して成り立つ感情である。

(2) 乳児期における人とのかかわりの発達

人とのかかわりは誕生の瞬間から始まり生涯にわたって続くものである。子どもは身近な人々との生活を通して、人とかかわる楽しさ、心地よさ、親しみなどを感じ、人とかかわろうとする意欲や態度を形成していく。下の表では発達過程を八つに区分して「人とのかかわり」がどのように変化していくのか表に整理した。しかし、子どもの発達を年齢で画一的に捉えるのではなく、発達のプロセスを大切にしながら一人一人の幼児がそのよさを発揮しつつ、育っていく過程を重視していきたい。『子どもの発達と社会生活(朝倉書店) 保育所保育指針(厚生労働省)他参考』

年齢	大人とのかかわり	遊びの発達や種類	子ども同士のかかわり	道徳性・規範意の芽生えを培う要素
6ヶ月未満	愛着を形成する ● 生後1週目くらいから大人への注視をする。 ● 大人の働きかけに反応して笑う。 ● 大人がしゃべりかけると何語で応える。 ● 特定の大人との強い信頼関係にもとづいて、情緒が安定する。	模倣遊び 他児への関心も見られ他児の動きや遊びの模倣をする。	● 生後2ヶ月すぎから他児への注視がみられる。 ● 他児の鳴き声に反応し見つめる。 ● 乳児と乳児の相互交渉がみられる。(見つめ合って微笑む、手を伸ばし合う)	愛着関係の形成
から1歳6ヶ月	探索活動のころ ● 特定の大人との情緒的な絆が深まりあやしてもらおうと喜ぶなどやり取りが盛んになる一方で、人見知りをするようになる。 ● 要求があると声を出して大人の注意をひく。 ● 大人の動作や声の模倣。	一人遊び 一人でものに深くかかわり満足して遊んでいる。	● 他児につられて泣く(情緒的同調行動) ● 玩具への関心が強くなり、玩具を媒介にした他児とのかかわりが見られる。 ● 乳児2人でいると、一方が玩具から手をひくと他方が取る対比的、また一方が玩具に働きかけ、もう一方はじっとみている相補的役割が見られる。	人と関わる喜び
1歳3ヶ月から2歳	自己主張の芽生え ● 大人が近くにいると安心して一人で遊ぶ。 ● 親しい人に自分から声をかけたり、動作をしかける。 ● 一人になると、大人をさがす。 ● 自己主張もできるようになり、大人の説得や提案はなかなか受け入れることができないこともある。	傍観 仲間が遊んでいる様子を見ている。	● 自分が開始者となり、いないいないばあや追いかけてごっこなどソーシャルプレイができる。 ● 玩具の取り合いや他児をひっぱたり押したり様々に働きかける姿が見られる。 ● 他児に玩具を持っていくプレゼント行動、泣いている他児を慰めたり、いたわったりする姿も見られる。	社会性の芽生え
2歳	● 自我の育ちが見られ、強く自己主張する姿が見られる。 ● 象徴機能の発達により、大人と一緒に簡単なごっこ遊びを楽しむようになる。	みたて遊び	● 2～3人で集団遊び(追いかけてあひ、おしゃべり)する姿が見られる。みたて遊びができるようになり、年長児のごっこ遊びに加わろうとする。	基本的な生活習慣
3歳	自立と依存 ● 身の周りの自立が進み、保育者の手をあまり必要としなくなる。 ● 精神的には保育者に頼り、甘えることもあるが、身体の接触から、共感してもらい、認めてもらうことで満足するようになる。	平行遊び 一緒にいて同じようなことをしているが、相互交渉は見られない。	● 話し言葉の基礎ができて、盛んに質問するなど知的興味や関心が高まる。 ● 自我がよりはっきりしてくるとともに、友達のかかわりが多くなるが、平行遊びであることが多い。 ● 大人の行動や日常生活において経験したことをごっこ遊びに取り入れ、象徴機能や観察力を発揮して、遊びの内容に発展性が見られるようになる。	自己信頼性
4歳	自我の形成 ● 友だちと一緒に行動することを喜ぶ一方で、友だちとの関係で悩む時期もあり、保育者に気持ちを共感的に受け止めてもらい、葛藤を乗り越えていけるようになっていく。	連合遊び 一緒に遊んでいるが、役割分担が明確にされていない。	● 仲間とのつながりが強くなる中でけんかも増えてくる。その一方で決まりの大切さに気づき、守ろうとするようになる。 ● 感情が豊かになり、身近な人の気持ちを察し、少しずつ自分の気持ちを抑えられたり、我慢ができるようになってくる。	自己抑制
5歳	自立心の高まり ● 保育者に受け止めてもらえる安心感、信頼感が園生活の基盤となる。 ● 保育者の信頼関係によって、積極的に環境にかかわっていく。保育者との関係において受け止める、受け入れられる関係を味わう心地よさは、友だちとのかかわりにおいて、相手の考えを理解する、気持ちを受け止めることにつながっていく。 ● 周囲の人々からの温かいかわりによって、自己を発揮して様々な活動ができるようになる。	協同遊び 一緒に遊んでいて、役割分担が明確でイメージが共有されている。	● 仲間とともに活発に遊び、言葉により共通のイメージを持って遊んだり、目的に向かって集団で行動することが増える。 ● 遊びを発展させるために自分たちで決まりを作ったりする。自分なりに考えて判断したり、批判する力が生まれ、お互いに相手を許したり認めたりといった社会生活に必要な基本的な力を身に付けていく。	自己発揮
6歳		ルールのある遊び ※これらは、遊びの発達段階を表しているが、5歳児でも遊びを仲間と展開する前に他の子どもの遊びをじっくり見て楽しんでいたりと、様々なタイプの遊びに取組む姿がある。	● これまでの体験から、自信や、予想や見通しを立てる力が育ち、心身ともに力があふれ意欲が旺盛になる。 ● 仲間の意志を大切にしようとし、役割の分担が生まれるような協同遊びやごっこ遊びを行う。 ● 様々な知識や経験を生かし創意工夫を重ね、遊びを発展させる。 ● ルールのある遊びを通して、遊び方やルールを変えて楽しむ姿が見られる。	折り合い 葛藤 いざこざ 自己有用感

2 幼児期において規範意識の芽生えを培うための基本的な考え方

(1) 幼児の規範意識の芽生えとは

幼児期には様々な人とののかかわりを深めていきながら、「道德心の芽生え」や「規範意識の芽生え」が育まれていく。その芽生えを豊かに培うには、基本的生活習慣の形成を図るとともに、周りの大人の信頼関係に支えられ、自己を発揮し他の幼児とかかわる中で、他人の存在に気づき、お互いに思いを主張する体験が大切である。「道德心の芽生え」や「規範意識の芽生え」をはぐくむには以下のような幼児の姿を捉えていく必要がある。

- ① 自己を主張することと抑制することを繰り返しながら、お互い相手の話を理解し合える。
- ② 友達と一緒に楽しく遊びを続けるためにも、相手の思いを察して譲りあうことやルールが必要なことを学ぶ。
- ③ いざこざや葛藤体験を通して人に対する思いやりや、やってよいことやいけないことに気づく。

また単に「与えられた決まりを守る」ことができるようになるということではなく、それぞれの子ども自身が友だちと共に遊びを続けるために必要なルールや、気持ちよく生活していくために必要な決まりについて気づいたり、新たなルールの必要性について自分たちなりに考えたり、生み出したりしていく過程も大切である。

(2) 規範意識の芽生えを培うための様々な体験

右図は、「規範意識の芽生え」を培うために幼児期に体験してほしいことを表している。

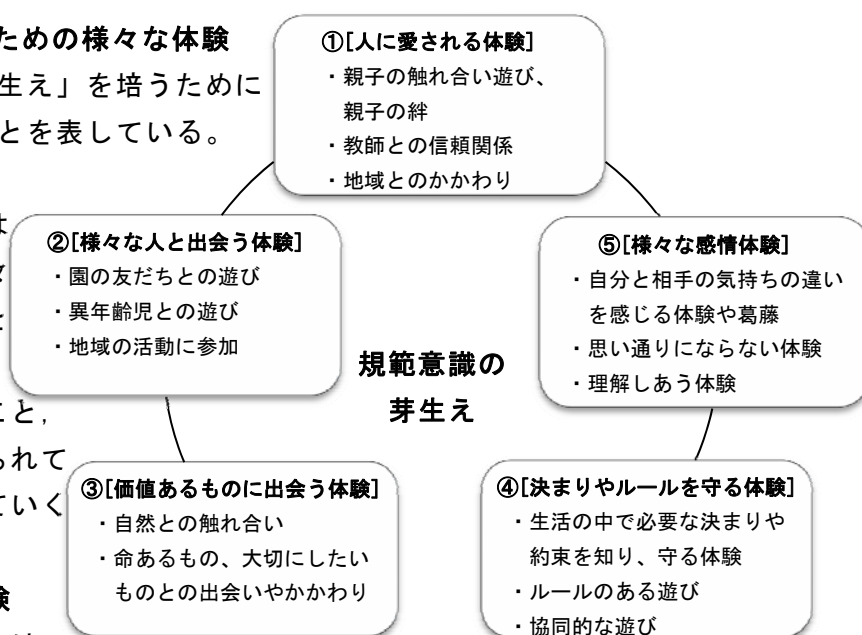
① 人に愛される体験

人とかかわる力の基礎は自分が保護者や周囲の人々に温かく見守られているという安定感から生まれる。人に対する信頼感をもつこと、さらにその信頼感に支えられて自分自身の生活を確立していくことによって培われる。

② 様々な人と出会う体験

人間関係を豊かにするには、様々な人々と交わることが大切

である。同年齢の子同士だと競争意識が芽生えてくる。また年齢が異なると、幼い子どもに対しては優しい心で接したり、年上の子どもには少し緊張感や憧れを持ちながら接する。そのような交わりを通していろいろな人とののかかわり方やルールなどを学んでいく。さらに様々な地域に住んでいる人々と接することによって、いろいろな考え方の人がいることや、文化や習慣の違いにも気づく。そして高齢者やハンディのある人々との交流によって、みんなと一緒に生活していくために気をつけなければいけないことや、人の役に立つこと



『平成22年 全国国公立幼稚園長会リーフレットより』

を経験していくようになる。

③ 価値あるものに出会う体験

自然の美しさに触れたり、身近な動植物に親しみ、世話をしたりする中で、生命あるものへの感性や弱いものをいたわる気持ちなど、豊かな心情を育てていく。

④ 決まりやルールを守る体験

はじめからルールやきまりを守って遊べることを優先させるのではなく、ルールやきまりを守る必要性を自分で感じ、自分の意志で判断して行動できることが大切である。ルールやきまりがあってそれに沿って遊んだら楽しかったという経験も大切だが、幼児同士が遊びの中で、思いを出し合いながら友達とかかわり、心の中で葛藤したりしながら折り合いをつけてルールやきまりをつくっていく過程が大切である。

⑤ 様々な感情体験

友達とのかかわりの中から一緒に遊ぶ楽しさや嬉しさ、思い通りにならない怒り、寂しさなど様々な感情を体験し、自分とは違った感じ方、考え方をする人もいと他者の存在を意識するようになる。いざこざを経験することは、心の中での大きな葛藤を伴う。友達の気持ちがどんなにわかっているとしても、「自分はこうしたい」など強く思う時、この気持ちの辛さから逃げ出さずに、自分の気持ちに折り合いをつける経験は、子どもの心を強くしていく。

以上のまとめから幼児期の遊びや生活を通して様々な体験が、規範意識の芽生えを培うための基盤となると考える。

3 教師の援助について

(1) 様々な援助の方法

「援助」とは、幼児が環境にかかわって興味や関心をもちながら生み出していく活動を豊かにしていく支えや、その中で一人一人の体験が幼児の成長・発達を促すようにする保育者の保育活動の総称をいう。丁寧な幼児理解を行うためにも、教師の援助の工夫が大切である。様々な援助の方法を表にまとめる。

『保育用語辞典参照』

援 助	援助の方法
直接的な援助	活動に行き詰まったり、思いが実現できなくて困っていたりする時にヒントやアイデアを教える、葛藤や挫折の体験で自信をなくしている時の励ましやなぐさめ、願いが実現したときの喜びへの共感等である。幼児の必要感に応じてなされることが重要となる。
間接的な援助	環境を通しての幼児へのかかわりである。個々の幼児の興味や欲求等を察知し、幼児の発達に願いを込めながら、幼児と環境の出会いを演出する保育の営みをいう。思わずかかわりたくなるような状況をつくり、見守る、一緒の場にいる、モデルとしての人的環境になる等、多様な方法がある。
心にとどく援助	個々の幼児をかけがえのない存在として受け入れ、幼児の感動を共有し、その心の動きや願いにそって働きかける援助であり、興味関心の持ち方は個別であることを理解し、肯定的で温かい関心を寄せていく。

ふれる援助	幼児のからだに触れながら行う保育の営みをいう。ふれる援助により幼児は保育者の存在を肌で感じ、心を安定させ自己の活動を広げるようになる。
見守る援助	幼児は自由に活動を展開する中で、相互にかかわり合い、状況をつくり、葛藤体験を乗り越えたり、みずから課題を持って挑んだりして生活を豊かにしていく。幼児自らが主体的に活動する姿に温かい心を寄せ、保育者の指示を最小限にとどめ一人ひとりの成長の様子を捉える援助である。
聴く援助	保育者が幼児の立場に立って、一人ひとりの気持ちを丁寧に汲み取り応答する援助の在り方の一つである。幼児は自分の思いや願いに耳を傾け、心を込めて聴いてくれる大人の存在によって気持ちを安定させ心を開き、のびのびと自分を表現するようになる。このことで幼児との信頼関係ができ、幼児の切実な願いがみえたり、保育者と幼児の思いの違いに気づかされたり等、有用な効果がうまれる。
認める援助	幼児が自分で努力したこと、工夫したこと、葛藤や挫折を乗り越えたことなどをあたたかく受け止め、ともに喜んだり励ましたりする援助の在り方である。幼児を認める時「がんばった」とか「よくできた」といった表面的な認め方でなく、その子の生活への取り組みの経過を細かく捉え、どんなことを認めているのかを具体的に伝えることが必要である。また、保育者の気持ちを幼児に伝える表現力も豊かにしていく努力が望まれる。
提案する援助	幼児とともに生活する中で、活動が行き詰まって停滞した時に保育者が投げかけるヒントや、より楽しく遊べるためのアイデア、友だちとの関係がうまくいかないで悩んでいる時に活路をみつける言葉かけ等、子どもの生活が充実し、より豊かになるための保育者の働きかけをいう。
投げかける援助	保育者が教育的な意図を持って、ある状況をつくり出し幼児に出あわせたり、幼児が活動する場面でその遊びや活動がさらに楽しく充実するであろうと思われる保育者のアイデアや考えを提案する等の援助である。
関係づける援助	人とのかかわりをひろげる、遊びと遊びをつなげる、他の場や状況の変化に着目させる等、幼児の生活を豊かにしていくために保育者が意図的に幼児同士の関係や場の関係、遊びの関係等をつなぐかかわりをいう。

(2) 規範意識の芽生えを培う教師の役割

教師は、幼児との信頼関係をしっかり築いて心の支えとなりながら、共に考え、子どもの気づきを促しその時期に適切な体験を繰り返し経験させる中で、少しずつ芽生えを育んでいけるよう努めていくことが大切である。また、幼児の発達は行きつ戻りつしながら促されることから、幼児理解を深めながらその実態を捉え、繰り返しかかわり、援助していくことが大切である。

上記に援助の方法をまとめてみたが、本研究では、様々な援助の中でも、幼児期における規範意識の芽生えをはぐくむための教師の役割について以下の4つを大切にしながら、幼児の様々な感情体験に沿った援助ができるよう実践に取り組んでいく。

〈幼児を肯定的に見る〉

幼児の育ちつつある面やよさに目が向けられていると、自然にかかわり方が温かいものになり、その幼児の行動を信頼して見守ることができるようになる。園生活の中で、幼児一人一人の行動を発達しつつある姿として捉え、温かくかかわりながら幼児の視点に立ち、幼児を肯定的に見ることが大切である。また、一人一人の幼児と直接触れ合いながら、幼児の言動や表情から、思いや考えを理解し、幼児の視点で幼児の気持ちに共感することが大切である。

〈葛藤体験を大切にかかわる〉

友達とのかかわりを深める中で、様々な感情体験の場面において、いざこざや葛藤体験をしている場面では、特に丁寧にかかわっていくことで幼児がいろいろなことを学ぶ機会となる。教師はすぐに善悪の判断せずに、子ども達の思いを受け止め、幼児なりに気持ちを表現できるよう言葉を補ったり、それぞれの思いを代弁したりして、わかるように伝えていく。教師に自分の思いを理解してもらうことで、相手の立場からも考えていけるように援助することが大切である。

規範意識の芽生えを 培う教師の役割

〈折り合いをつける時間を大切に見守る〉

幼児は友達とのぶつかり合いや思い通りにならない経験などを通して、相手の思いに気づいたり、楽しく遊ぶための方法を見いだしていくなど、自分の感情をコントロールできるようになる。教師はその姿を大切に受け止め、見守り、共感したり、認めていくことが大切である。折り合いをつけていくことで自分の気持ちの調整ができ、さらに遊びが深まっていく。幼児が自ら気持ちの立て直しが難しそうな場合には、心のよりどころとなってかかわっていく必要がある。

〈遊びの工夫をする〉

幼児は、友達と一緒に遊ぶ中で、様々ないざこざや葛藤を重ねながら、次第に順番や遊びのルールなどを守らなくてはいけないことに気づく。教師は遊びの中でルールの必要性を幼児なりに理解できるようにし、遊びのルールを守ろうとする気持ちを持たせていくことが大切である。幼児自身が友達との一緒に遊びを楽しみ、遊びのルールを作ったり、それを守って遊んだりしながら面白さを十分に味わえるような環境の構成や援助が必要である。

VI 保育実践

検証保育までの実践と本時の取り組み

友達とかかわる楽しさ、一緒に動く心地よさ、友達の動きに対応して考えたり動いたりする面白さを味わいながら、遊びとルールのつながりを経験できるように、幼児の実態や発達の時期を考えて以下のような取り組みを行った。

	○ねらい ・ 内容	◎教師の援助 ★環境構成
第1回 12月 第32週 12/15	○友達とのつながりを感じながら、一緒にゲームに参加してかかわりを深める。 ・友達と一緒に手をつないだりスキンシップを図りながら、楽しくゲームに参加する。 ・並んだり、順番を決めたりしながらゲームのルールに気づく。	★遊戯室のスペースを広く設け安全面には十分気をつける。 ◎期待感をもたせる言葉かけをする。 ◎一人一人がチームの一員として遊びに参加できるようにする。 ◎幼児同士のかかわりを見守り、気持ちに寄り添いながら共に考えていく。
第2回 12月 第32週 12/16	○友達とのつながりを感じながら、一緒にゲームに参加してかかわりを深める。 ・同じチームの友達と一緒に力を合わせてゲーム遊びを楽しむ。 ・ゲームのルールがあることに気づきながら、ルールを守って遊ぶ。	◎仲間意識が高められるよう、共感しながら参加する。 ◎ゲームの中で見られる、それぞれの主張や気持ちを十分受け止め、互いの思いが伝わるようにしたり、納得して気持ちの立て直しができるような援助を心がけていく。

第 3 回 12 月 第 32 週 12/17	○友だちと一緒に、ルールのある遊びを楽しむ。 ・ドッジボールのルールを知る。 ・ルールについて友達同士教え合ったり、教師と確認し合いながら遊びを進めることができる。	◎ドッジボールのルールをわかりやすく図で伝える。 ◎ゲームを通して、楽しさを味わえるような言葉かけをしルールに気づかせていく。 ◎頑張りを認め教師や友達と共に遊びを進めていく楽しさや喜びが実感できるようにする。
第 4 回 (本時) 12 月 第 33 週 12/21	【保育仮説】 集団でのゲームを通して、幼児自身がルールの必要性を感じるような援助をすることによって、ルールを共有しながら楽しく遊びを進めていくことができるであろう。 ○友だちとかかわりながら、ルールのある遊びを楽しむ。 ・集団での遊びの中で、ルールの必要性に気づきルールを守って楽しく遊ぶ。 ・ルールについて話し合ったり、確認し合ったりしながら遊びを進めることができる。	★コート内周辺に危険物など落ちていないか確認し、安全面には十分気をつける。(雨天時は体育館を使用する) ★準備するもの(ボール、笛、ホワイトボード、石灰ライン引き、三角コーン) ◎先週からの活動を振り返り、ボードやマグネットを使ってみんなで決めたルールやゲームの流れを確認する。 ◎ルールについて子ども達が考えたり、確認し合ったりする場面では気持ちを受け止め、教師も共に考えていく。 ◎ゲームを進めながら、いざこざが生じる時には、先に結論を出さず、子ども同士の話の過程を大切にしていける。 ◎自分の思いのままに行動しようとする子に関しては、周りの子の反応も捉えながら、個に応じた言葉かけをする。 ◎ゲームに負けた悔しさ、悲しさなど自分だけでは気持ちが立て直すことが難しい子へは、感情を十分受け止めながら、その子の頑張りを認め、次への活動の意欲を持たせる。 ★ゲーム終了後、全員で振り返りの時間がもてるように落ち着いて話しができる雰囲気を作る。 ◎ゲームについて振り返り、子どもたちが自ら考えていけるような援助をする。 ◎子どもの発表する気持ちを丁寧に受け止め、子どもの気づきを大切にしながら共感できるように援助していく。 ◎友達の話に耳を傾ける姿や、みんなに伝えたい思いを認める。 ◎教師もみんなと共に楽しんだ嬉しさを表現し、次の活動への期待や意欲につなげる。
【反省・評価の視点】 ○友達と共に楽しむ心地よさを味わいながら、仲間の一員として行動することの喜びを実感することができたか。 ○ゲームを進めていく中で起こってくる、様々な感情体験を通して、ルールの必要性を感じるような援助ができたか。 ○「ルールが大切」「ルールを守らないといけない」と言葉で伝えるのではなく、「おもしろかった」「またやりたい」という満足感が持てる体験からルールの必要性に気づいて遊びを進めていくことができたか。 ○遊びのルールがわかっていても、忘れてしまったり失敗してしまったりした子の立場も捉え次に生かせるような声かけを行うことにより、遊びのおもしろさを味わえることができたか。 ○子どもたちの姿で自己コントロールしようとする、またはコントロールする場面が見られたか。		

VII 結果と考察

作業仮説の検証

作業仮説(1)

園生活の中で、相手や周りの気持ちに気づけるような援助をすることで、気持ちよく生活していくために必要な決まりに気付くであろう。

作業仮説(2)

遊びの中で、葛藤体験や折り合いをつける体験などをし、ルールを守りながら遊ぶ楽しさが味わえるような援助をすることで、自分の気持ちを調整する力をはぐくむことができるであろう。

2つの仮説から

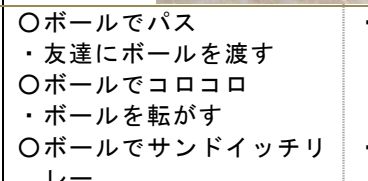
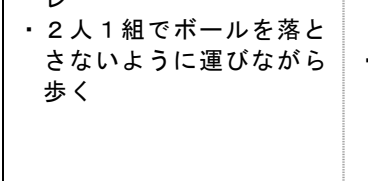
教師の手だて、

子どもの変容を

表にまとめてみる。

【集団での遊びを通して】～様々なゲーム遊びでの感情体験をしていく姿から～

幼児期の規範意識の芽生えは園生活や遊びを通して様々な体験から育まれていく。検証保育までの実践では、集団での遊びを充実させながら意図的にゲームや競い合う経験を取り入れた。子ども達に馴染みのある遊びからスタートし、友達同士で手を取り合ったり、スキンシップをはかったりしながら友達とのつながりを肌で感じ、一緒に遊ぶ楽しさを味わうことができることをねらいとした。

場 面	集団での遊び	教師の配慮	様々な感情体験 →	手だて
遊びの流れ ↓	伝承遊び 	・遊びのモデルとなり楽しさを感じさせていく ・共に楽しみながら場にに応じアドバイスなど言葉かけをする	○友達を誘い合い、人数が増える楽しさ ○増えたことによる難しさ ○友達との手を離さず遊びを進めることができた喜び ○何回も挑戦しようとする感情の盛り上がり、やる気	○認める援助 ・楽しさを共感する ・仲間と力を合わせたこと等を認める ○見守る援助 ・友達同士のかかわりや幼児の主体性を大切に見守る
	ボール遊び ① 	・子ども達同士で並ぶ順番を決めさせる ・楽しく遊べるアイデアを提案する ・仲間意識を持たせながら遊びを盛り上げていく	○チーム内で一列に並ぶ順番で思い通りにいかずぶつかり合う ○友達のぶつかり合いを見て折り合いをつけようと提案する ○思い通りにならない悔しさ ○勝敗がつく楽しさ、悔しさ ○力を合わせる体験	○見守る援助 ・様子を見守りながらお互いの思いを汲み取る ○直接的な援助 ・同じチームの子の気持ちも捉えながら言葉かけをする ○認める援助 ・勝敗がついたがそれぞれのグループの良さを伝える。
	ボール遊び ② 	・ボールを怖がる子やみんながルールを理解することを配慮して簡単なゲームから提案する。 ・時にはモデルとなり共に遊びを楽しむ	○ボールを投げたいという思いから仲間とボールの奪い合い ○ゲームに勝ちたいという気持ちからコートの線を気にせずに起こる衝突 ○自分たちで決めたルールを守らない子との衝突 ○仲間と共に逃げるスリル感 ○勝敗がつく楽しさ、悔しさ ○力を合わせる体験	○見守る援助 ○提案する援助 ・幼児のぶつかり合う場においては見守りを基本とし状況によって言葉かけをする ○間接的援助 ・教師が見守っている安心感を持たせながら、ルールについて考えている場を大切に捉える。

遊びの流れ ボール遊び ③	○対面式ドッジボール ・全員内野に入り、ゲームスタートする。 ・ボールに当たったら外野になる ・どちらかのチームの内野が全員ボールに当たったらゲーム終了となる	・子ども達と考えたルールを一緒に共有しながら教師も共に楽しむ	○ボールの奪い合いによる気持ちのぶつかり合い ○仲間と共に逃げたり、ボールを取ったり当てたりするスリル感 ○勝敗がつくため、嬉しい、くやしい、悲しい気持ち ○同じチームの仲間から優しい言葉をかけてもらったときの嬉しさ	○直接的な援助 ・自分だけでは気持ちが立て直すことが難しい場面では、感情を十分受け止め言葉かけをする。 ○関係づける援助 ・その子の頑張りを認めチームの仲間と気持ちをつなぐ場を設ける

【考察】

- ・伝承遊びという子ども達に馴染みのある遊びから、子ども同士手をつなぎ、触れ合いを肌で感じ楽しむ体験させることで、クラスみんながルールを理解し共有しながら遊ぶ楽しさを味わい、仲間の一員としてゲームを楽しむ姿が見られた。またチーム対抗のゲームでは勝敗がつくことで、仲間を応援しあい、一緒に力を合わせていこうと声かけをしたりして気持ちを言葉に表現する仲間意識も見られた。教師も共に楽しみ、クラス全体で活動できたことで一体感を感じることもできたのではないかと考える。
- ・ボール遊び②では、ボールに当たらないように逃げるスリル感を味わいながら、当たるとコートから出るというわかりやすいルールから始めたことで、みんなでルールを共有しながら遊ぶ楽しさを味わうことができた。しかし遊びを進めて行くと、転がすことだけでは物足りなくなったのか「投げてもいい？」と聞く子がおり、遊びを終えての振り返りの時間で、対面式ドッジボールを経験したことのある子が次回のボール遊び③の提案をした。話し合いの結果、以下のようなルールに発展していった。

はじめのルール（ころがしドッジ）	発展したルール（対面式ドッジ）
・転がして当てる	→ 投げて当てる
・バウンドしても当たり	→ バウンドしたらセーフ
・内野は逃げるだけ	→ 逃げて取ってもよい



振り返りの時間

子ども達がルールについて考えている場面を大切に見守り教師も共感し合うことで、自分たちでルールを変えていく面白さ、友達と楽しい遊びを続けたいという思いから、次の活動への期待感へとつながっていったのではないかと考える。

【対面式ドッジボールを通して】～自分の気持ちを調整していこうとする姿から～

検証保育では、これまでの経験から仲間と共にゲームを楽しむ中で、思い通りにならない経験や葛藤を繰り返し体験する過程で以下のような教師の読み取りや手だてを通して、楽しく遊ぶためのルールの必要性に気づかせ、自分の気持ちに折り合いをつけることで遊びが楽しくなることをねらいとした。

場 面	子どもの姿（A児）	教師の読み取り	手だて	変 容
ボールの奪い合い 葛藤体験	内野にいるA児だが、コートの外に転がったボールを追いかけて取り返そうとする。そして相手チームの外野の子とボールの奪い合いになった。友達同士で「外野のボールだよ」とルールを教え合っている。	ゲームへの意欲は感じられるが、ルールの誤解をしている。	○見守る援助 ・ルールを教え合っている様子を見守る ○ふれる援助 ○認める援助 ・泣いているA児の手を取り気持ちを受け止めてルールを丁寧に伝え、共にコートに戻る。	しばらく教師と手をつないでいたA児だったが泣き止み、気持ちを切り替えゲームに参加する。

気持ちの 折り合い	ボールに当たり外野となったA児だが、今度は友達にルールを教えている姿が見られる。 	ゲームを進めていく中で、ルールがわかり始めている。 ゲームの楽しさを感じてきている。	○認める援助 ○見守る援助 ・葛藤を乗り越え、自分の気持ちに折り合いをつけたA児を認める。 ・ルールを教えている姿に共感する。	ルールに気づきルールを守って遊ぼうとする姿が見られた。また仲間への言葉かけが多くなりゲームを楽しんでいる様子が見られた。
場 面	子どもの姿（B児）	教師の読み取り	手だて	変 容
負けた悔しさ 思い通りにいかない経験 ↓	B児は、これまではゲームに負けると悔しさから、泣き出し、気持ちの立て直しの援助が必要であった。今日のゲーム前は明るい表情で活発な姿が見られる。	B児の表情から今日は勝ちたいという思いや意欲が伝わる。	○認める援助 ○関係づける援助 ・楽しい雰囲気の中でゲームに参加できるよう言葉かけをする。 ・頑張りを認めたり、同じチームの子にも言葉をかけ仲間意識を持たせる。	体じゅうでゲームを楽しんでいる様子が見られる。仲間を応援したり、ルールを教え合う場も見られる。
気持ちの 折り合い	最後まで頑張りながらゲームに参加していたが、今回も負けてしまう。表情は残念そうだが泣き顔ではない。ゲームの振り返りの時間、B児に「ここに座るんだよ」と教える子もいたが、仲間と少し離れて参加している。	負けても、ぐっとこらえている様子である。いつものように泣いていないので気持ちの変化があるのだろうか。	○認める援助 ○見守る援助 ・頑張りを大いに認めながら悔しさを共感する。振り返りの時間、チームの仲間とは少し離れて座るが様子を見守る。 ○投げかける援助 ○聴く援助 ・B児に今日のゲームを振り返ってどんな気持ちだったのか投げかけてみる。	B児の発表では「負けたけど楽しかったです」とみんなに伝える。 

[考察]

- ・ ゲームの中で、ボールの奪い合い等からぶつかり合いや、興奮していくとルールを忘れてしまう場面があったが、はじめからルールを守って遊ぶことを強要せず、教師がその姿を受け止め、安心感を持たせながら幼児なりに考える時間を確保したりすることで、子ども達同士でルールを確認し合ったり、教え合ったりする姿が見られたと考える。
- ・ 「ルールを守る」ことよりも、ルールがあることや、ルールの必要性に気づき、守ろうとするプロセスを重視した援助をしたことで、「みんなと一緒にゲームができて楽しかった」「次はこんなふうにやってみたい」等と友達とのかかわりが深まり、みんなで勝ちたいという目的意識や仲間意識が見られるようになったと考える。
- ・ ゲームに負けると必ず泣いて悔しがるB児であったが、その時に友達に頑張りを認められ、励ましてもらった喜びを味わうことにより、今日は気持ちの変化が見られたと考える。単に我慢したのではなく、負けてもぐっとこらえてまた挑戦したら次は勝てるかもしれないと意欲も見られ、自分を抑制する姿が育ってきていると考える。

- ・ 振り返りの時間では、教師の価値観を直接押しつけてしまうのではなく、ゲームでの子ども達の様子や頑張りを認めていきながら教師の投げかけをすることにより、子ども自身も振り返りながら、いろんな場面での判断を「こうしたほうがよかった」等自ら考えている姿が見られた。しかし振り返りの場の持ち方においては、子ども達が集中できず、時間等への配慮が必要であったと感じる。教師が話す視点を整理して投げかけることでさらに、ルールについての気づきや、友達の感情を子ども達同士でも共有することができたであろうと今回の実践からわかった。

【個の育ちを通して】～A児の友達とかかわる姿から～

好きな遊びの時間に数名で砂遊び（ダム作り）をしているA児は、自分のイメージを出しながら試したり工夫したりして楽しんでいる様子が見られる。自己を発揮しながら友達と遊んでいる中で、欲求や考えがぶつかり合いいざこざが生じるが、幼児が行ってよいことと悪いことや遊びを通してのきまりなどが実感できる大切な場面と考え、A児の心の動きを捉える。

場 面	A児の姿	教師の読み取り	手だて	A児の変容
友達とのイメージの違い ↓	自分の思いを言葉で伝えて友達に受け入れてもらおうと必死に主張している。	自分のイメージを通してしたい気持ちと、友達と一緒にいかかわって遊びたい気持ちがある。	○提案する援助 ・受け止める ・相手の思いも気づかせる ・共感する	自他の気持ちを受け止めお互い欲求は異なることに気づかせることで、友達の気持ちを少しずつ受け入れていく姿がみられるようになる。
友達との物の取り合い ↓	友達が使っていた道具を「かして」と言って取る。A児の一方的な態度から、友達とぶつかり合う。 	A児は「貸して」と言ったことで自分の思いは伝えたが、相手の思いには気づかないでいる。	○見守る援助 ・ぶつかり合う様子を捉え見守る ○提案する援助 ・ぶつかり合いが長く続いているので言葉かけをする	お互い主張し合ってどちらも気持ちをぶつけている。教師の言葉かけは耳に届いている様子だが気持ちは収まらない。
いざこざが生じる ↓	言葉で伝えても思い通りにいかないの、友達を叩いてしまい乱暴な手段が見られるようになる。	お互い思いを主張し合うことは認めるが、乱暴な行動が出ることで問題の解決法として正しくないことを伝えなければいけない。	○ふれる援助 ・手をとって落ち着かせ心を安定させる ○聴く援助 ・気持ちを丁寧に汲み取る	教師が手を取り、両方の気持ちを聴いて共感することで落ち着いて話そうとする。落ち着いて話すことで場面を振り返り、相手の気持ちも考えるようになる。

〔考察〕

- ・ A児が自分から興味や関心をもって遊びを楽しんでいる姿を見守り受け止めることで、自分の思いが実現するように自己発揮しながら工夫したり試したりする姿が見られた。その中で幼児同士の自己主張のぶつかり合いから、自分の主張ばかりを通さず友達の言葉に耳を傾けたり、友達の工夫を取り入れてみたり、時には譲ったり等、教師と共に相手の思いを理解することで幼児なりに考えようとする姿が見られるようになったと考える。

- ・ いざこざが生じると、すぐに「順番」「ジャンケン」などとルールを持ち出したり、「先にたたいた方が悪い」「貸してと言ったから使ってもいい」と判断する場面が見られる。教師の援助として、その子の行為の目的や動機など、なぜそうしたかったのか、そうせざるを得なかった理由は何かという視点からもっと深く読み取り、子ども達に投げかけ考えるきっかけにすることが必要だと感じる。また一度だけではなく何度もいざこざを体験する過程を大切に捉え、その時々の子ども達の態度を柔軟に受け止めて根気強くかかわっていくことで、生活や遊びのきまりに気づき、規範意識の芽生えにつながると考える。

VIII 研究の成果と課題

1 成果

- (1) 規範意識の芽生えを培うための援助の種類や方法を表に整理することによって、きまりの必要性に気づくプロセスを重視した援助の方法がわかった。
- (2) 幼児が葛藤や折り合いを付けていく場面等に特に視点をおいて援助することによって、自分の気持ちを調整しようとする等、規範意識の芽生えを培うことにつながった。
- (3) 仲間意識やルールの必要性を感じさせるゲームの提案をした援助をすることで、友達とのつながりが深まり、ルールの必要性に気づいたり、自分たちでルールを作ったりする姿も見られ、友達とルールを共有して遊ぶことの楽しさを体験することにつながった。

2 課題

- (1) 規範意識が芽生える過程について、幼児一人一人が様々な経験をしながら遊び込める環境や援助の工夫をし、これからも研究を深めていく必要がある。
- (2) 今後も多面的な視点、子どもの目線に立った視点を大切にしていき、幼児理解を深めていく必要がある。

《主な参考文献》

『幼稚園教育要領解説』	文部科学省	フレーベル館	2008
『幼児理解と評価』	文部科学省	ぎょうせい	2010
『幼稚園じほう』	全国国公立幼稚園長会事務局「時報部」	2009	2008
『初等教育資料』		東洋館出版社	2009
『幼稚園教育要領の基本と解説』	無籐 隆他	フレーベル館	2008
『事例で学ぶ保育内容[領域]人間関係』	無籐 隆	萌文書林	2007
『幼児期から児童期への教育』	国立教育政策研究所	ひかりのくに	2005
『心を育てる幼児教育』	神長美津子	東洋館出版社	2004
『幼稚園における道徳性の芽生えを 培うための事例集』	文部科学省	ひかりのくに	2001